

保育者による自由研究

—保育の時間性・主体性を問い直す—

栗原啓祥（認定こども園清心幼稚園）

1. 問題と目的

保育現場では、昨今のコロナ禍対応、ICT化等に伴う保育実践の多様化が著しい。なかでもコロナ禍における保育実践は困難さを極めている。2020年度は一斉休校や登園自粛の影響で、活動の流れや継続性を維持することが難しくなった。「定常的な時間感覚の揺らぎ」が保育者の焦燥感を生じさせる一方、保育者の視野を広げるきっかけになることも指摘され¹、子ども一人ひとりの興味関心や経験、育ちに適した生活や活動のあり方がより問われている。

ところで保育の「主体性」は、主に子どもに関わる研究や実践が多く語られている。子どもが「やってみたい」という思いを持って活動に取り組む姿勢を促すには、教師自身が活動を楽しみ、集中して取り組む姿を見せて子どもをひきつけることも教師の役割と言われている。一方「時間」については、「時間的条件」のように、幼児の主体的活動や体験の質に影響を与える要素として考えられてきた²。そして、奇しくもコロナ禍で保育者の働き方や時間感覚も見直されつつある。

しかし、前述のように時間感覚すらも変容するなか、保育者自身も活動を楽しみ、集中して取り組む姿を見せるにはどのような方法やアプローチがあるだろうか。筆者の勤務する園ではコロナ禍以降、保育現場のリアリティさへの再認識が起り、保育者自身が関心をもち、自分がやってみたいことを園に持ち込んで、企画・探究する活動がこれまで以上に生じていった。これを自由研究と呼び、本研究では、こうした自由研究的な活動がどのようにして成立し、園の中で機能しているのかその諸条件について検討する。また、自由研究的な活動を営む個別の保育者の意識や活動のプロセスに着目し、活動の準備や環境をどのように整えて子どもと関わっているのか、報告することを目的とする。

2. 対象と方法

(1) 研究協力者について

① 保育者1名（以下、Aさん）に研究協力をえた。Aさんは、教育学部を卒業後、認定こども園清心幼稚園（以下、清心幼稚園）に2020年4月に着任した幼稚園教諭である。清心幼稚園は、3歳児クラスと4歳児クラスのいずれも担当する体制をとっており（表1）、その中でAさんは、2020年度は3歳児クラス、2021年度は4歳児クラスの子どもと関わる機会が多かった。

年度	3歳児クラス	4歳児クラス	配置保育者
2020	20名	23名	あわせて6名
2021	27名	21名	あわせて6名

表1 園児数と配置保育者の人数

2021年度の配置保育者、他5名のうち正規保育者が3名で、Bさん（勤続12年、経験年数17年）、Cさん（勤続3年、経験年数12年）、Dさん（勤続0年、新任）と

パート保育者2名であった。

② 対象園について

明治期に創立して以降、地域と関わりながら園内外の専門家やアーティストと関わってきた歴史がある。現在は、プロジェクト型保育に分類されるような、子どもの主体的で対話的かつ継続的な探究活動を軸に実践している。朝と夕方が合同保育なため、保育者は担当外の子どもと関わることも日常的である。今年度のAさんは、昨年度に続く「色」と関わる遊び、色水とオイルを混ぜて色を分離させる、色水を入れたクリアケースを重ねて携帯電話のライトを当てる、などを展開していた。7月からは「麴づくり」のリサーチを続けており、今後の実行日に向けて準備を進めていた。また、10月からは4歳児らと「麦づくり」も始まった。なお、昨年度はCさんの発案から畑から田んぼを作る「米づくり」を経験している。

(3) データの収集方法

夏休み明けの2学期、生活が落ち着き、11月からクリスマス準備のためのツリーやリース作り、「麦づくり」など複数のプロジェクト的な活動が並行しているタイミングでインタビューを実施した（2021年12月）。「麴づくり」の活動開始前に具体的な準備や意識等を聞くためこの時期を選択した。インタビューは直接聞き取り、調査の前に簡単な事前の聞き取り調査を行った。主な質問項目は、Aさんの興味関心ごと、興味関心の背景、自由研究的な活動の準備と環境構成、子どもとの関わり、保育者同士の連携、などとした。協力者とは研究承諾の意思を確認した。

(3) データ分析の方法

録音したインタビューデータを文字に起こした。その上で質的データ分析法、佐藤³を参考に、語りの内容を分類した。語りのまとまりの意味を要約したオープンコードを構成し、それらに関連する内容ごとに説明する焦点的コードを生成した。

3. 結果と考察

分析により、Aさんのインタビューデータは5つの焦点コード（「トライしたくなる職場環境」「Aさんの根底にある意識」「保育者の関心ごとから始まる自由研究」「多様なリサーチとシミュレーション」「活動に適した場づくり」）に整理できた。以下、それぞれの分析結果要点である。

(1) 自由研究を支える園の環境とAさんの意識変容

① トライしたくなる職場環境

先輩保育者であるCさんがAさんに新たな活動リサーチを提案することが複数語られ、Cさんも積極的に自分の関心ややりたい活動の提案を行って情報を交換していた。さらにCさんが具体的な子どもの姿を加えながらの

語りに、Aさんも同時にイメージ湧いてきて、ワクワクし、さらにやってみたくなる気持ちが生まれていった。また、AさんとCさんとがそれぞれに探してきたものを持ち寄って相談し合うことで、新しいアイデアが開かれていく協同的なリサーチ関係になっていった。時にはAさんにとってCさんの想定外の言葉がきっかけとなり、後日こういうこともできるかもしれないと想像が広がることもあった。また、周囲の保育者も保育者同士がやりたいことができるように、保育者の姿を拾っていく保育者が多いこと、予想と違う子どもの姿も、子どもの主体的な姿として受けとめ、次の遊びや活動の時に「そんなのもあったね」と自然に子どもとやりとりし、本当に向き合おうとする同僚により印象をもっていた。

② Aさんの根底にある意識

大学が美術専攻で、2年時より自分自身が「気になること」に向き合い、3年近く作品を制作していくプロセスの中で、さまざまな素材や道具、多様な表現方法と出あってきた。その中で、今だせる最善の表現、自分なりの表現を見つけるために、「自分の中にどういう表現をしたいか」を意識して突き詰めていった。制作をしながら、「この素材、こういう表し方ではなかったか」「こういう形でもない」「これを使ったけど違う」のように問い続けてきた。その結果、今でも園で子どもと色で遊んでいる時など、あの時の卒業制作をこうしたらよかったかなと振り返っているときがあると語る。しかし、子どもと活動していると、自分の経験だけではないことも起こり、子どもが「こんなやり方もあるの?」「こんな使い方もあるんだ!」とワクワクしていると、自分の気分も上がり、子どもと新しい開拓を少しずつ増やしていきたいと考えるようになった。

(2) 自由研究の展開とプロセス

① 保育者の関心ごとから始まる自由研究

前述のように、Aさんは自分にとって新しい発想や想定外の発想をするCさんがきっかけとなり、活動を調べたり、イメージを沸かせたりしていた。また、昨年とは同じ活動にならないよう、子どもたちの育ちの変化を見て活動を検討し、子どもの声も聴きながら、こうかな、こんなふうに組み合わせられるかな、と自分の中でイメージして考えていた。その中で昨年来づくりをしたことの続きで、きっと家庭でもやったことがない麴づくりを、麴菌から作る準備を進めている語りがあった。子どもと一緒に調べているが、Aさんが子ども以上に強い関心をもっており、Aさんから子どもたちに「これってどう?」と聞くこともあった。すると子どもたちからは、「あれとあれを組み合わせると違った味ができるかも?」と興味を持つ子どもも現れてきた。なお、今現在、学生時期から面白いと思っている陶芸を活動のタネとしてもっており、園に持ちこむかどうか検討している。

② 多様なリサーチとシミュレーション

Aさんは、活動の中で子どもと「楽しさを一緒に共有したい」ということと、子ども自身が「あーなるとどうなるの?」「こうなると違うのかな?」というセンサーを持つようになれたらという思いを背景に、次のようなリサーチ・準備を始めていた。アート作品からのインスピレーション、ICTを駆使したリサーチ、地域の専門家へのヒヤリング、この材料で何ができるか頭の中でイメー

ジしたり紙面に描くなどしたりして、直感的な発想を具体的なパズルのピースとして具現化。さらにイメージの中で子どもがどのように発想したり使ったりしそうかのイメージ像を重ねていく。その後、実際に子どもとやりとりして具体的な活動に落とし込んでいく。事前に試作しすぎない程度に制作したり実験したりすることもあり、その場合は1割程度の完成が見通せた時点で、活動に適した場を構成していた。

③ 活動に適した場づくり

Aさんが主に企画を進めてきた「麴づくり」は、Aさん自身が麴に関心を持ち、麴を作る姿、保育室の一角での実演などの活動を「子どもがみる」という場の構想だった。研究所のように真っ白で無菌のような場なのか、アーティストのアトリエのような場なのか、それらを子どもが見るとしたらどのように設けるとよいか、をイメージし、モノの置き方、場の囲み方、もし壁を作るとしたらどのような素材でどの向きに立てるとよいか、壁の一部は天井から吊った方がよいか、なるべく子どもが麴の変化にも気がつけるようにするために、麴と似ている「白」色の使い方、子どもの視線はどこから通すとよいか、などの検討を行っていた。

4. 総合考察

Aさんは学生時期の学びを生かし、Aさん自身の直感と丁寧なリサーチによって自由研究的な活動を多様に拓いていた。その背景には、Cさんをはじめ、他の保育者と関わる刺激と安心感があり、そうした保育者同士のやりとりから新たな活動が引き出されていく機能が働いていたと考えられる。その点で「麴づくり」の活動は、本当に真剣な保育者の実演を「子どもがみる」という珍しいアプローチである。しかしそうした実践も、もし子どもが興味関心を示されなければ、保育者側の勝手な思い違いになる。誤解を恐れずに言うならば、自由研究を行おうとする人物は、多様な各種の専門家も対象になるだろう。その点では、保育者それぞれの興味関心のありようが課題である。これは今後の保育者の人材育成の観点へも新たな示唆を与えているとも考えられる。私たちの関心ごととは個人の趣味嗜好ともつながっている。日常の園内環境や研修に限らず、個々の保育者の興味関心を揺さぶり、世界を広げていくきっかけや、新たな世界との出会いの楽しさが実感できる体験が大切になってくる。これからの保育運営は、保育施設設置者や保育者の考え方、支え方次第で新たに拓かれていく。これまで園の中や保育では扱えないと思っていたことも、こうした新たなアプローチから繋がり広がっていくと考えられる。

本研究はあくまで単一事例研究であり、今後より多様な保育者、専門家、保育施設を対象とする必要がある。

参考文献

- (1) 境愛一郎・栗原啓祥 (2021) コロナ禍による登園自粛を巡る保育者の経験と意識および価値観の変遷 国際幼児教育研究
- (2) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説
- (3) 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法—原理・方法・実践 新曜社

本研究は、境愛一郎 (共立女子大学) 先生の助言を受けています。この場をお借りしてお礼申し上げます。